

DX+

新サービス創出に向けた
データ匿名化技術の活用&
基盤構築の自動化



Theme



Use Case



Reference
Architecture





テーマ / Theme

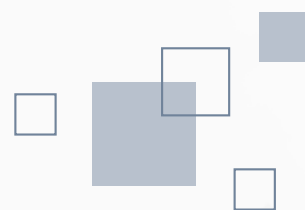
ビジネスを加速させるための取り組みをご紹介

新サービス創出に向けた データ匿名化技術の活用& 基盤構築の自動化

コスト削減

構築作業の簡略化

セキュリティ向上



課題 / Issue

オンプレミスからクラウド移行への道筋が見えず、 データの安全面にも不安がある

2017年5月に施行された「改正個人情報保護法」では、データの自由な流通・利活用の促進を目的とした「匿名加工情報」の制度が新設され、一定条件をクリアすれば第三者への自由なデータ提供が可能になった。これにより多くの企業が新たな商品・サービスの開発、的確なマーケティング戦略といった事業拡張に向けた柔軟なデータの利活用を推し進めている。

一方で顧客情報などを守る観点から自前のオンプレミス環境で開発業務を進めているケースも多く、さまざまな課題が顕在化しているのも事実である。たとえば、オンプレミス環境の肥大化により機器の管理が煩雑化し、膨大な運用コストが発生している。あるいは定期的なアプリケーション開発により、開発用のデータが陳腐化し、バグの温床となっている。さらには開発環境のミドルウェアの最新化が後手にまわり、重大なバグ発生時の

原因特定・調査が困難となっているなどである。

このような課題を解決するためには、クラウド環境へのリフト&シフトは有効な一手だ。しかし、アプリケーション開発における予期せぬ情報漏洩につながる潜在的なバグを防ぐためには、本番環境と同レベルの開発環境(及び開発データ作成)の準備が必要になるため、膨大な稼働と時間を覚悟する必要がある。

加えて、セキュリティに対する不安の解消も避けては通れない。クラウド上で顧客情報を扱うということは、オープンネットワーク上に顧客情報を晒すことを意味し、情報漏洩リスクが格段に上がるためだ。さらに通信量増加に伴う通信速度の低下もクリアしておく必要がある。

概要 / Overview

クラウド移行のカギは構築の自動化とデータ匿名化

本番環境と同レベルの開発環境をクラウド上に構築する第1のポイントは自動化ツールの活用にある。手動での構築を可能な限り減らすことで人為的なミスを減らすことができ、複数の開発環境があっても同じ実行プログラムを利用できるため大幅な構築の容易化、迅速化が図れるためだ。同じ実行プログラムのため構築後のバージョン管理が行いやすいというメリットも生まれる。

第2のポイントはクラウド上にある顧客情報を匿名化してデー

タ漏洩リスクを抑えることだ。ツールを活用して本番データを匿名化、開発環境で利活用すれば本番環境相当の試験が開発環境で実施できるようになる。つまり、開発のスピード、効率が格段に向上できるわけだ。

さらにクラウドへの接続にVPNと相互/中継接続基盤を利用すればデータ流通の安全性が向上でき、通信量増加に伴う通信速度の低下といった問題も解消できる。



ユースケース / Use Case

テーマを実現による業務の変化・メリットをご紹介します

Use Case 01

開発環境の構築自動化

環境構築をツールで自動化することでオンプレミスからクラウド移行にかかる開発工数を削減。さらに一つの実行プログラムで複数の開発環境を作成できるため工期を短縮でき、稼働後のバージョン管理といった運用・保守の容易化も見込める。

Use Case 02

顧客情報の匿名化

クラウド上に存在する顧客情報などの本番データをツール活用で匿名化。情報漏洩リスクを低減し、安全・安心なデータ活用ができる。さらに本番環境に近い試験が開発環境で行えるようになるため、開発の迅速化を図ることが可能だ。



リファレンスアーキテクチャ / Reference Architecture

テーマを実現するシステム構成をご紹介します

アーキテクチャ上のポイント

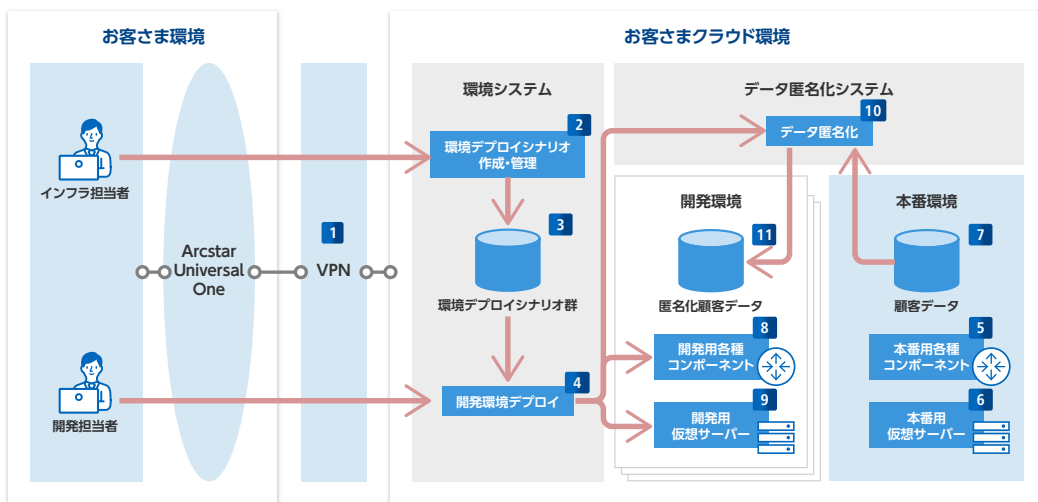
Point

本構成のポイント

- 本番環境と同様の開発環境を自動構築することにより、構築の簡易化と同時に環境ごとのバージョン管理で容易に行える。
- 本番環境のデータを匿名化し、開発環境で利活用することで本番データ相当の試験を開発環境で実施できる。

導入効果

- クラウド移行による運用・保守作業の簡素化
- 環境構築の自動化による工期の短縮
- 本番データの匿名化による安全性の担保



詳しくはこちら





本件の詳細につきましては、
お気軽にNTTコミュニケーションズにお問い合わせください。

[お問い合わせはこちら](#)